

いのちと地域を守る

防災・減災のページ

むすび塾

第126回巡回ワークショップ @仙台・東北大「新聞論」受講生

持続可能な震災伝承のアイデアを出し合った学生たち1月19日、仙台市青葉区の東北大



持続可能な震災伝承の在り方

河北新報社は1月19日、通算126回目の防災ワークショップ「むすび塾」を仙台市青葉区の東北大川内北キャンパスで開いた。後期授業・同社の「東北を拓く新聞論」を受講した東北大1、2年生7人が参加。3月の東日本大震災15年に合わせて、今後の震災伝承の在り方について意見を交わした。

必修科目化やVR活用

震災を次世代に伝承するための提言

- 提言1** 震災を「自分自身の問題」として捉える視点を、次世代に伝える仕組みをつくる
・仙台の各大学で、1年次に必修科目として東日本大震災を体系的に学ぶ機会を設ける。
- 提言2** 「なぜ学ぶのか」「どう生活に生かすのか」を明確に伝える
・被災当時の人々の生活や判断の過程をVRなどの最新技術を活用して追体験できる仕組みを取り入れる。
- 提言3** 震災伝承への関心層に応じたアプローチを展開する
・強い関心を持つ層に、ボランティア活動や地域での伝承活動に主体的に関われる機会を提供する。
- 提言4** 日常の中で繰り返し目に触れる形で震災の記憶を呼び起こす仕掛けを強化する
・SNS（交流サイト）や動画配信サービス等を活用し、短時間で反復的に目に触れるコンテンツを制作、発信する。
- 提言5** 伝承施設を来訪者が震災を「感じ」「考え」「他者と語り合う」ことのできる体験の場へと再設計する
・語り部との対話を通して、被災当時の生活や判断を自分や家族に引き寄せて考え、備えの行動を促す。

学生たちは一人一人、震災伝承の課題を整理し、持続可能な震災伝承のアイデアを発表した。課題には、災害に対する危機感の希薄化、語り部活動の継続困難化、伝承施設の来場者減少などが挙げられた。

解決策として、法学部2年の加藤結子さん(20)は、さまざまな地域から学生が集まり卒業後に全国に分散する仙台の利点を挙げ、「無関心層に関心を持ってもらうため、大学の初年次教育に教訓を学ぶ体験学習を組み込むのはどうか」と提案した。

語り部活動を継続するため、学校や企業と連携した伝承活動のビジネス化や、市民や企業からのふるさと納税活用策などを訴える学生もいた。

神戸市出身の文学部1年吉原雄司さん(20)は、VR（仮想現実）などを活用して疑似体験ができる資料を増やすことが大事だと語った。

工学部1年の立石謙心さん(20)は広島市出身。教育を受けて原爆は恐ろしいと理解したが、80年前の出来事と認識し自分事と捉えられなかった経験から「未経験の人にとって、震災は歴史上の出来事になってしまっている。VR（仮想現実）などを活用して疑似体験ができる資料を増やすことが大事だと語った。

形骸化防ぎ未来につなぐ



学生たちは東北大後期授業で河北新報社「東北を拓く新聞論」を受講し、震災伝承の現場と現状を学んだ。授業の成果として持続可能な伝承の在り方をまとめ、今月2日に宮城県庁と仙台市役所を訪問し、提言書を提出した。

県庁で伊藤哲也副知事、仙台市では高橋輝ダイバーシティ推進担当局長に提言書を手渡した。学生たちは震災が歴史となりつつあり、社会全体で当事者意識は希薄化し、伝承行事も形骸化している指摘。「どうすれば、震災を自分事として受け止められるのかを考え、提言をまとめた」と説明した。

学生たちは、河北新報社が企画する学生対象の311「伝える／備える」次世代の被災地視察に参加した。昨年11月には宮城県石巻市震災遺構大川小で、同校6年だった次女みずほさん(当時12)を亡くした「大川伝承の会」共同代表の佐藤敏郎さんから、学校防災や事前の備えの重要性について説明を受けた。

今年1月は仙台市宮城野区の東北

宮城県庁と仙台市役所に提言書



仙台市の担当者らに提言の骨子を説明する学生たち1月22日、仙台市役所

福祉大仙台駅東口キャンパスで、震災を後世に語り継ぐ仙台市職員らのグループ「チーム仙台」の取り組みを学んだ。仙台市内で被災者に対応した保健師や、津波被害を受けた名取市の町内会長の体験談の朗読に耳を傾けた。

震災を次世代に伝えるために



監修 減災・復興支援機構

イラスト さとうあけみ

日常に取り入れ伝える

減災・復興支援機構専務理事 宮下 加奈さん



東日本大震災をはじめとする自然災害の被災体験を振り返り、防災の教訓や課題を考えてみませんか。町内会や学校、職場など少人数の集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は教育・防災連携室022(2)411-1500。

防災教育というハードルが高いので「生き抜く伝承」など名前を変え、日常生活の中で伝えていくのではないかと。私の故郷の東京都三宅島では幼い頃から「あつちの山が曇っているから明日は雨だ」など、自然教育の中で知識を得て、災害にも生かせるようになっている。家庭で年に1度でも口を決めて災害について話し合えば、持続性につながっていく。いかに災害を自分事と捉え、伝えていくかが大事。今後、東北を離れても、学んだこと自分の気持ちを乗せて伝えることのできる人になってほしい。

■専門家から

人々の交流の場が大切

3・11メモリアルネットワーク語り部 阿部 任さん



伝承は防災だけではなく、生き方の話ということとを忘れないでほしい。企業のリーダー研修などで社員が被災地で学ぶケースが増えている。プログラムを増やし、ビジネス化を試行錯誤している段階だ。語り部が営業者するのは難しい。行政がそこを担うよう提言してもらえたらありがたい。

伝承活動に参加する学生にバイト代を払ったり、単位を認定したりすることは、入り口の敷居を低くするのに有効だと思う。被災地から被災地への伝承もある。いろいろな人が直接相互に触れあえる場を作ることこそ大切だ。

■むすび塾に参加して

●語り手の気持ち鍵 いずれの発表も、経験や日常生活と震災を結び付けようとする姿勢が見られ、震災の記憶が風化する中で当事者性をいかに保つかという問題意識が共有されていた。



語り部の役割について、事実を正確に伝えること以上に、語り手自身の「気持ち」が乗っているかどうか、聞き手に震災を自分事として捉えさせる鍵になるという指摘は強く心に残った。(法学部2年 加藤結子さん 20歳)

●伝承には工夫必要 印象的だったのは、加藤さんが言及した「伝承活動における語り手と受け手の関係の固定化」だ。自分は仙台に



来てから、震災伝承の活動に参加しているが、確かにどんなときも学び手、聞き手の立場であり、当事者性に欠けていた。学校教育の一環として行われている震災伝承で、体験したことがない世代が、震災を自分事としてとらえられるような工夫が必要だ。(工学部2年 野添諒さん 21歳)

●生活に防災意識を AR(拡張現実)やVRの活用は企業の場合、CSRの一環で技術協力をしてもらえるのではないかと。伝承活動の



ビジネス化は、単に防災教育という視点ではなく、危機管理や想定外の事態に対応するための教育として営業することで、興味を持ってもらいやすくなるのが分かった。防災教育も知識の習得ではなく、日々の生活に取り込むことが重要だと実感した。(法学部1年 荒木麟太郎さん 19歳)

●自分の盲点を発見 発表者一人一人への阿部さんのアドバイスを聞いて、震災伝承活動に日頃から携わっている人の問題意識の高さを



を感じた。自分の発表について、阿部さんは「伝承活動は防災だけではなく」と指摘した。自分の盲点を発見すると同時に、石巻市震災遺構大川小で、語り部の佐藤敏郎さんが話した言葉「生き方、向き合い方でも伝えていく」を思い出した。(文学部1年 吉原雄司さん 20歳)

●施設の立地も大切 他の地域から来た人が訪れやすい場所に震災伝承施設を造るという提案があった。神戸市の人と防災未来センターは人の往来がもたらすような場所



所であり、広島市の原爆ドームは中心市街地にある。三陸の施設は、駅から近い位置にあるとは言えない。語り部の話を全国で聞ける取り組みは、活動よりもそれを知ってもらおうことの方が難しいのかもしれないと感じた。(工学部1年 後藤巧人さん 19歳)

●境遇重ね自分事に 体験していない人でも伝えられるように「語り部の台本化」を提案した。「台本に語り部自身の考えや気持ちな



どを組み込み、『自分事』として捉えるようにすることが大事」という助言に納得した。聞き手にとって実感が湧かないことが、解決すべき課題だと考えていたので、自らの境遇を重ね、被災者の体験を伝えることは、自分事とする上で有効だったと思った。(工学部1年 立石謙心さん 20歳)

●意見出す場が大事 震災伝承には、被災者の思いに直接触れ合う機会が必要だ。語り部の話とチーム仙台的朗読を聞いて、心情が伝



わってきた。石巻市震災遺構大川小では視察後、語り部の佐藤敏郎さんと少しの間、話をすることが強く印象に残った。次世代への伝承を考えるとき、今回のようにいろいろな人が意見を出し合う場が、今後ますます大事になるのではないかと。(工学部1年 小林佑楓さん 19歳)